



平安文学における渡殿の役割 : 恋愛発生場として

水田, ひろみ

(Citation)

國文論叢, 40:1-13

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011625>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011625>



平安文学における渡殿の役割

——恋愛発生 の場として——

水田 ひろみ

はじめに——「廊」と「渡殿」に関する諸説——

『源氏物語』蜚卷に次のような文章がある。

馬場殿は、こなたの廊より見通す、ほど遠からず。「若き人々、渡殿の戸開けて物見よや。左の衛府にとよしある官人多かるころなり。少々の殿上人に劣るまじ」とのたまへば、物見むことをいと思へり。対の御方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに懸けわたして、いまめきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕などさまよふ。菖蒲襲の袂、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、西の対のなめる、好ましく馴れたるかぎり四人、下仕は棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日の装ひどもなり。こなたのは濃き一襲に撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおのいどみ顔なるもてなし、見ところあり。(③二〇五―二〇六頁)

ここは六条院東の町において、馬場の競射が行われる場面である。光源氏は東の町に住む花散里の部屋に顔を出して、「若き人々」

つまり女房たちにこの競射を見物するように言っている。馬場殿は花散里の住む場所の廊から見通せる程の場所にあり、女房たちのいる場所から見物することができるといふ。

さて、この女房たちのいる場所である「渡殿」の解釈については様々な議論がある。この場面の地の文では「廊」「廊の戸口」が登場するが、光源氏の口からは「廊」ではなく「渡殿」という言葉が発せられる。池田亀鑑氏は『源氏物語事典』^①の「廊」の項目で、「同じものを廊とも渡殿とも呼んだ例」として、蜚卷のこの部分を挙げられている。辞書類でもまた、「廊」と「渡殿」は同種のものとして説明されていることが多い。^②数々の注釈でも「廊」と「渡殿」は混同されて解釈されているが、^③『宇津保物語』などの物語の中では、邸宅の描写に、例えば「檜皮のおとど五つ、廊、渡殿、さるべきあてあての板屋どもなど、あるべき限りにて、蔵町に御蔵いと多かり。」(俊蔭①一〇三―一〇四頁・兼雅三条堀河邸の説明)とあるように、「廊」と「渡殿」が併記されていることが多い。同種のものであっても、この当時では、二者の間には何らかの区別があったと考えられる。^④

「廊」の形態や場所については鈴木温子氏の詳細な研究がある。鈴木氏はこの蜚蜚の場面を丁寧に吟味することによって、「廊」と「渡殿」が別のものであると断定されている。鈴木氏は「こなたの廊」が花散里の居所に近接する「廊」であり、「廊」は「戸」がつくものだと仮定し、この「廊」の「戸」をすでに開いているものとされ、「渡殿の戸開けて物見よや」という描写から、「渡殿」と「廊」は別物と考えるのが妥当とされている。そして、光源氏の発言を花散里方の若い女房たちに対するものと捉え、女房たちの観覧席を「渡殿」、玉簪方の女童・下仕たち、そして花散里の女童たちの観覧席を「廊」だと解釈されている。⁽⁶⁾

この「廊」と「渡殿」に関して、通路の場合は、同じものに対して「廊」と「渡殿」の両方の語が適応されることがあった。

『大内裏図考証』⁽⁷⁾では、大極殿と小安殿を繋ぐ一間に二間の小建物を「渡殿・歩廊・昇殿廊・上廊・小安殿南廊・登廊・大極殿北渡殿」などの種々の呼称で説明している。建築学側でもこの「廊」「渡殿」に関して数々の研究がなされており、その中で、井上充夫氏は前記の小建物の数々の呼称に注目し、廊の語を用いる場合に「歩」「昇殿」「上」「登」などの通行を意味する限定詞を付している点から、「廊」と「渡殿」の相違について、「廊は特定の機能を持つ建築種類の呼称ではなく、各種の機能を与えられるもので、単なる建築物の形態上の呼称である。これに反し、渡殿の方は、通路空間という機能上の呼称であって、両語の成立根拠は本質的に異なる」と結論付けられている。⁽⁸⁾一方、平山育男氏は「廊」と「渡殿」の相違について、床の有る無しが問題であるとし、国風化が進む中で「廊」にも床が張られるようになった時

点で両者の区別は消滅し、『源氏物語』成立当時には両者の区別はなかったという立場を取られている。

また、太田静六氏は著書『寝殿造の研究』⁽¹⁰⁾の中で平安末期の貴族の邸宅を考察され、この時期の「廊」「渡殿」について次のようにまとめられている。

一般に寝殿と対屋などのように主要棟間を結ぶ場合を渡殿と称し、侍廊や中門廊のように末端に何もなないか、釣殿程度の場合には廊と呼んでいる。透渡殿や中門廊のように通路としての場合は別として、一般に廊・渡殿は母屋と庇の梁間二間からなるが、対代廊の場合は例外である。いずれの場合でも、廊・渡殿の両側に簀子縁が附されて通路などに用いられる。

〔第四章 平安末期における貴族の邸宅／第十一節 平安末期における寝殿造の総括〕五二四頁

太田氏は「釣殿程度の場合には廊と呼んでいる」と述べられているが、後述するように、釣殿につづく建物を渡殿と呼んでいる場合もある。

これまで紹介した説から総合的に判断するに、この二つは規模こそ同じものであるが、「渡殿」は元々建物間をつなぎ、通路の役割を持つ殿堂であった。それが後に女房の局なども備えるようになった。一方「廊」は基本的には殿堂に付属する細長い空間であり、状況に応じて通路としても機能していたものと考えられる。『源氏物語』蜚蜚の例を見ると、「渡殿」に「若い人々」がおり、「廊」に「童・下仕」がいる。「若き人々」は女房のことであり、雑用を勤める「童・下仕」よりは身分の高い侍女なので、作者には「渡殿」を「廊」よりも上位空間として捉える意識があったの

かもしれない。『源氏物語』の諸注釈では屢々、この「渡殿」と「廊」が混同されているが、本稿では、「渡殿」と「廊」を成立根拠と空間的秩序の点で相違があるものとし、通路としての機能を持ちながら居住空間としても使用されている「渡殿」に焦点を当て、この場が『源氏物語』を中心とする平安朝の物語上で果たす役割について考察してみたい。

渡殿の位置

太田氏の指摘のように、渡殿は一般的には寢殿と対をつなぐものという認識が定着している。渡殿が寢殿と東・西・北の対との間にあったことは、藤原実資の日記「小右記」にも「於寢殿東邊〈寢殿与東對有二渡殿、北渡殿下云々、〉」（長和五年三月八日条）や「進寢殿與東對間南渡殿邊」（長和五年四月二日条）「卯刻立渡殿〈一字、寢殿与西對北渡殿、一字寢殿与北對渡殿〉」（寛仁元年十月廿六日条）という記述からわかる。このように古記録では渡殿の場所をその都度説明することが多い。

しかし、『源氏物語』等の物語では、渡殿という言葉は頻繁に使われるが、その位置を説明する記述は殆ど見られない。これまでの解釈では渡殿の位置を寢殿と対の間に限定するものが多かったが、その位置は一概には決定できないようで、例えば、『源氏物語』夕顔巻に描かれる渡殿は明らかに寢殿とは無縁の場所にある。光源氏は夕顔と二人で静かに過ごすために、なにがしの院を訪れる。その院では「西の対に御座などよそふほど」（①一六〇頁）とあり、西の対を二人の居所としていた。夜中に物の怪の気配を感じた源氏は渡殿にいる宿直人を起こしに行く。その場面に

は、「西の妻戸に出て、戸を押し開けたまへれば、渡殿の灯も消えにけり」（①一六五頁）とあり、源氏が西の妻戸から戸を押し開けて渡殿の様子を見たことが描写されている。西の対にいた源氏が「西の妻戸」から出るとあるので、その渡殿は寢殿と対を結ぶものとは考えられない^⑪。建築学者の池浩三氏は「六条院想定平面図」の中でこの箇所に関して、渡殿の前方に二の対が存在したのではないかと考えられている。このように、どの建物をつなぐ渡殿なのか判然としない場合も多いが、その位置は寢殿と対の間のみに限定されたものではなかった。そこで、寢殿と対を結ぶ以外の渡殿の例を以下に挙げ、その位置について検討していきたいと思う。

まずは『宇津保物語』に、藤壺女御（あて宮）の里下がり際に際して、源涼とさま宮（源正頼の娘で、あて宮の妹）夫婦が女御に自分たちの住んでいた場所を提供する場面がある。この涼夫婦の居所は「沖つ白波」巻の絵指示によると正頼邸東南の町の西北の対と説明されていた（②三一五頁）。この対は国譲上の巻になると「西の一の対」とも呼ばれている（③三八頁）。源涼夫婦の以前の居所について、さま宮は次のように説明する。

（さま宮）「さて、ここにはおはし住ませたまへ。寢殿はいとわろかめり。これはもとのをばとり違へて、かの吹上といひける所を、取りにやりて奉るなめれば、いと住みよし。この西なる屋どもなんども、かしこのなれば、対のやうになむ。そがうちにも、とかくよかるべきにせさせたる所なめり」

（国譲上③四一頁）

涼夫婦の住んでいた西の一の対は吹上宮のものを使ったものであ

るから、寢殿より住みやすいという。また、「西なる屋ども」とあるように、西の一の対の西に別の建物も存在した。その建物については、

このおとどの西に、七間の檜皮葺きにてあり。左、右の渡殿あり。御厨子所には、その西の屋をしり（同巻③五七頁、五八頁）

と説明されている。七間の建物の左右には渡殿が付いていると書かれているが、それは一方は西の一の対に、もう一方は御厨子所にした建物に接続していたと考えられる。

次に釣殿に続いていると考えられる例もある。『狭衣物語』に、嵯峨院が、主人公狭衣との過ちによって出家した女二の宮のために、法華曼陀羅供養と法華八講を催す場面がある。この八講の終了後も、狭衣は退居する気持ちになれずに、一人嵯峨に残っていた。その場面を物語では「物のみ悲しければ、やがて川上に作り

かけられたる釣殿に、一人つくづく眺め入りたまひて、」（巻三・

②一二二頁）と表現している。狭衣はその釣殿で和歌を詠み、法華経の句を、声をはりあげて読むのだが、その声を聞いた若宮（狭衣と女二の宮との間の秘密の子）が狭衣の所に行きたいと騒いだので、宰相の乳母は若宮を抱いて「そなたの渡殿」（一七三頁）にやってくる。この渡殿は狭衣の居る釣殿へ通じるものと解される。時代は下るが、藤原宗忠の日記『中右記』永長元年十一月廿四日条の大地震の際の記述に「于時主上渡御西釣殿、（件渡殿臨前池）欲乗御前池舟之間也、」（主上＝堀河天皇、場所＝里内裏・閑院）という表現がある。また、釣殿と接続しているという確証はないが、同じく『中右記』嘉保元年八月十五日条に「已

依日暮也、寄御船於東渡殿、上皇令乗船、」（上皇＝白河上皇、場所＝鳥羽殿）とあり、池近くに渡殿があったことが窺える。『源氏物語』若菜下巻に「辰巳のかたの釣殿に続きたる廊を樂所にして、山の南のそばよりお前に出づるほど、」（④二七八頁）とあり、また、藤原資房の日記『春記』では、里内裏となった藤原教通の二条殿の釣殿の場所を「件釣殿在中門南廊々南」（長久元年十一月十一日条）と説明しており、これらの例から、前述の太田氏の説のように、釣殿に続く建物を廊とする説もあるが、『狭衣物語』の例が示すように、渡殿でつながっている場合もあったのではないだろうか。

また、釣殿と対の間には中門廊が置かれることが多かったが、『中右記』には中門廊の近くに渡殿があったことを窺わせる記述がある。

・ 今夕内侍所遷御東中門廊西渡殿、（嘉保元年十一月廿三日条）（場所＝堀河天皇里内裏・大炊殿）

・ 秉燭之程參高陽院、左大將殿若君御百日事也、先於小寢殿西庇饗饌、為公卿座、中門東之北渡殿、同為殿上人座（嘉保二年十月十七日条）（場所＝藤原忠実高陽院）

・ 東中門南廊西向渡殿為内侍所也、依無便宜、其北面為御神樂座、先御出、供神物之後有御拜敷、（中略）及子剋事了、中宮女房棹華船、寄池岸聞御神樂、（嘉保二年十二月八日条）（場所＝堀河天皇里内裏・閑院）

それぞれの渡殿の詳細な位置は不明であるが、これらの記述は寢殿と対以外の場所にも渡殿が存在したことを示している。

さらに、『渡殿』は藤原道長の建立した法成寺にも見られる。

この法成寺は『栄華物語』によると、「北、南、西の方と、廊と渡殿とを造りつづけさせ」（巻第十六「ものとしづく」）②二四八頁）た寺で、『大鏡』の法成寺金堂供養の際の記述には「南大門のほどにて見申ししに、笑ましくおぼえはべりしに、御堂の渡殿のものはさまより、一品宮の弁の乳母、いま一人は、それも一品宮の大輔の乳母、中将の乳母とかや、三人とぞうけたまはりし、御車よりおりさせたまひて、ゐざり続かせたまへるを、見たてまつりたるぞかし。」（藤原氏の物語・三五九頁）とある。また、法成寺行幸の際、後一条天皇は『栄華物語』に「阿弥陀堂の簀子よりおはしまして、東の渡殿に御座の所よそひておはします。」（巻第十七「おもむがく」）②二七一頁）とあるように、渡殿を御座所とした。この東の渡殿は阿弥陀堂と金堂を結ぶものであったと考えられている。

このように渡殿は寢殿と対をつなぐものばかりではなく、その他の殿舎をつなぐ場合にも設置された。最初に挙げた『源氏物語』夕顔巻の例では、池氏の説のように西の対の西に西二対があったか、または『宇津保物語』の例のように対とは別の建物があったのではないだろうか。もしくは『中右記』の例のように門の近くに中門廊とは別に渡殿と認識される建物があったとも考えられる。

居住空間としての渡殿

渡殿は前章で確認したように様々な場所に設けられており、『源氏物語』成立当時においては、廊よりも高級な建物として位置づけられていた。渡殿も廊も居住空間として使用されることが

あったが、『源氏物語』の作者・紫式部は渡殿の方を上位空間と認識していたようである。角田文衛氏によると藤原道長の土御門殿では東廊も西廊も渡殿と同じように、母屋と廂からなっていたらしいが、この邸宅の廊は儀式の場合を除いて、その場所はいずれも通路としてのみの利用であったようだ^⑭。廊は『枕草子』九五段によると、奥行きの浅い空間であり、住むとしたら手狭な感じがする場所であった。廊を居住空間としている例を確認すると、宮中では『寛平御遺戒』に「中重の北西の廊は、采女・女婦等各曹司と為し、居住すること家のごとく。」（『日本思想大系』8古代政治社会思想（岩波書店）一〇七頁）とあるように采女・女婦たちが曹司として使用し、また、『宇津保物語』では源正頼の息子たちも、「男君たちは、ある限り、廊を御曹司にしたまひて、板屋をさぶらひにしてなむありける。」（藤原の君①一三五頁）とあるように廊に居住していた。そして『源氏物語』の宇治八の宮の女房であった弁の尼も、寢殿の改築期間のみの使用ではあったが、同じく廊を居所としていた^⑮。浮舟も西の対を追い出されてからは廊に住むしかないという状況であった。しかしこの廊は「ほどりばみたらむ」（東屋⑥四一頁）場所であり、このような場所に浮舟を住まわせるのは、母・中将の君にとっては「飽かずいとほしくおぼえ」（同前）られることであつたという。つまり、廊は居住空間に成り得たが、何れも身分の低い侍女・男性・尼であり、浮舟のような姫君が住むのには相応しくない空間であつたと考えられる。以上の点からみても、高貴な姫君や身分の高い女房たちの生活を中心に語る物語の中でクローズアップされるのは、廊ではなく渡殿であつた。

〔D〕この院におはしますをば、内裏よりも広くおもしろく住みよきものにして、常にしもさぶらはぬ人どもも、みなうちとけ住みつつ、はるばると多かる対ども、廊、渡殿に満ちたり。

（蜻蛉⑥二六四頁）

〔A〕の記述からは空蟬付きの女房、中将の君の局が渡殿にあったことがわかる。引用箇所は空蟬が光源氏の御座所に近いことを気にして、肩や腰を叩かせたいからという口実で女房の局に移る場面である。小君は姉を捜し回って、やつとのことでこの場に辿り着いた。この渡殿の局周辺の様子について、小君は「いとむつかしげにさし籠められて、人あまはべるめれ」（①一二頁～一三頁）と表現している。〔B〕は二条院に引き取られた明石の姫君の乳母の局についての説明である。〔C〕は光源氏が女三の宮に歌を贈る時のことで、源氏は使いの者を呼んで、西の渡殿に居住している女三の宮付きの女房を通じて文を差し上げよと指示している。この女三の宮の女房の居所については、これよりも以前に、「そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり。」（若菜上④六二頁）と説明されていた。〔D〕は明石の中宮が六条院春の町に蜻蛉式部卿宮の軽服で里下がりしている場面である。普段お仕えしていないような女房もみな気安く住みついて、対や廊や渡殿までに満ちあふれているというのである。以上、『源氏物語』中の女房の居所について見てきたが、このような例は『源氏物語』以後の物語にも見られる。

〔E〕この続きたる渡殿に、人のけはひするを、立ちどまりて聞きたまへば、「いづら」「御殿油、いまは参れ」などぞ言ふなる。（中略）この渡殿は、人々のうち休む所にてあるに、知

らぬ人の、け近う物したまへるがつつましさに、しばし、寄り臥したまへるなるべし。〔狭衣物語〕巻四②二七六～二七七頁

〔F〕大將どのおはします方よりは別に、五間四面なる小寝殿・対ども、廊・渡殿など、皆、この御方の女房の曹司、侍所、藏人所などにせさせたまへるなるべし。〔狭衣物語〕巻四

②三二七頁

〔G〕西の対には、大納言殿の音無しの窓にしたまへば、そなたの北の渡殿を、乳母の局にしつらはせたまへり。〔夜の寝覚〕巻二・一六三頁

〔H〕（吉野の姫君を）宮に渡したてまつり給ふ。寝殿のひむがし面に、その北の対、渡殿かけて、女房の局ども、御しつらひなど、まばゆきまで磨きととのへて渡したてまつり給ふ。

（浜松中納言物語）巻第五・四四〇頁

〔E〕は故式部卿宮の妻で宰相の中将の母が病により出家し、亀山の寺にこもり、狭衣がその見舞いに訪れる場面である。文中の渡殿は母君のいる阿弥陀堂につづく渡殿と解される。ここに女房たちが居り、また娘の姫君も狭衣が客として母の側にいたので、憚ってこの渡殿に来ていた。〔F〕は狭衣がその姫君を自邸に引き取る場面。姫君付きの女房の曹司や侍所・藏人所が小寝殿・対・廊・渡殿にしつらえてあるという。〔G〕は男主人公・大納言が女主人公・中の君との間の秘密の子である姫君を迎えて、その乳母を彼の私室である西の対の北の渡殿に迎える場面である。『源氏物語』の明石の姫君の乳母と同様の扱いである。〔H〕は主人公の中納言が吉野山で見付けた姫君を異母妹と偽って自身の邸宅に迎える

場面である。北の対と渡殿が女房の局とされたようである。

このように、渡殿は女房たちの局として使用されることが多かった。そして、『源氏物語』蜚巻の例のように、身分によって居住できる場所も異なっており、渡殿に居住できるのは身分の高い女房に限られていたと考えられる。対が対代廊に代わる院政期以降、廊の位置づけも変化し、廊が身分の高い人の居住空間となる場合もあったが、『源氏物語』成立当時にはそのような使用例は確認できない。また、渡殿を女房の局に利用する例が見られるのも『源氏物語』が最初である。

恋愛空間としての渡殿

見てきたように、渡殿は女房の局があり、普段は主人の影になつてゐる女房たちがクローズアップされる空間でもあった。渡殿には常に女房の気配がし、そこでは若い男君たちとのコミュニケーションが繰り広げられていた。『紫式部日記』にはそのことを窺わせる記述がある。

暮れて、月いとおもしろきに、宮の亮、女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあらむ、妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の内侍の局に立ち寄りて、「ここにや」と案内したまふ。宰相は中の間に寄りて、まだささぬ格子の上押し上げて、「おはすや」などあれど、出でぬに、大夫の「ここにや」とのたまふにさへ、聞きしのばもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなどす。（中略）夜ふくるままに、月いと明かし。「格子のもと取りさげよ」とせめたま

へど、いとくだりて上達部の居たまはむも、かかる所といひながら、かたはらいたし、若やかなる人こそ、もののほど知らぬやうにあだへたるも罪ゆるさるれ、なにか、あざればましと思へば、はなたず。（二六〇～二六一頁）

中宮に昇進のお礼を言上してもらおうと、宮の大夫と亮が作者たちの局のある渡殿までやってくる。東の端の局は宮の内侍の居所であったが、彼女は留守で、今度は中の間にいる紫式部を二人の君達が訪れる。式部がいることを知った二人は、下の格子を取りさげさせて、彼女とコミュニケーションを図ろうとする。若い人ならばふざけあつても大目に見られるが、自分はどうもいかないと、式部は格子を外さないでいた。また、作者は渡殿居住の間に藤原道長の訪問まで受ける。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞ
まきの戸ぐちにたたきわびつる

かへし、

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑ

あけてはいかにくやしからまし（二二四～二二五頁）
右の文章と同様のものが『紫式部集』にもある。「夜もすがら」の歌は『新勅撰和歌集』に法成寺入道前摂政太政大臣つまり藤原道長の歌として載せられており、そのことから、「戸をたたく人」は道長を指すと考えられている。

このように、渡殿は女房たちの空間であり、女房が主役になれる空間でもあった。若い君達が女房のいる渡殿に立ち寄り、親し

く交際をするという光景は物語でも頻繁に見られる。『源氏物語』野分巻には、野分の見舞いとして光源氏と夕霧が秋好中宮の居所を訪れる場面がある。光源氏が中宮の御簾の内に入ったあと、夕霧は「渡殿の戸口に人々の気配するに寄りて、ものなど言ひ戯る」(③二七六頁)という行動に出る。蜻蛉巻では六条院春の町にある渡殿で夕霧の子息たちが女房と話をしている場面がある。薫もまた「東の渡殿に、開きあひたる戸口に人々あまためて、物語など忍びやかにする所」(蜻蛉⑥二六六頁)にやつてきて、彼女たちと交際しようとする。

ところで、六条院における薫のこのような行動については、薫自身が「おほかたには参りながら、この御方の見参に入ることの難くはべれば、いとおぼえなく翁びてにたる心地しはべるを」(蜻蛉⑥二五五頁)と言うように、彼と女一宮との対面の難しさから、今まではなかったことだという。薫は続けて「今よりはと思ひおこしはべりてなん。ありつかずと若き人どもぞ思ふらんかし」(同巻⑥二五六頁)と夕霧の子息たちの方を見ながら、女房たちに言い寄り、この後も、女房のいる渡殿を積極的に訪れるようになる。このように薫が渡殿という空間に興味を抱き、そこにいる女房たちと交際するようになったきっかけは、渡殿を一時的に利用していた今上帝女一の宮を垣間見たことであった。薫が女一の宮の姿を見たのは、まだ何の分別も付かない幼少の頃で、それ以来気配さえ聞くことがなかったという。女一の宮の普段の居所は匂部卿御巻によると、六条院春の町の東の対であった^②から、対に居住していても、その殿舎の奥深くで生活し、外にいる者に見られることのないように常に気を配っていたのだろう。

しかし物語は、その用心深い女一の宮を薫に垣間見させて彼に新たな憂愁を抱かせる展開のために、容易に彼女を垣間見させる機会を必要とした。そのために選ばれた場所が、渡殿という梁間二間の空間であった。この時の垣間見を物語では次のように描写する。

五日といふ朝座にはてて、御堂の飾り取りさけ、御しつらひ改むるに、北の廂も障子ども放ちたりしかば、みな入り立ちてつくるふほど、西の渡殿に姫宮おはしましけり。もの聞き困じて女房もおのおの局にありつつ、御前はいと人少ななる夕暮に、大将殿直衣着かへて、今日まかづる僧の中にならずのたまふべきことあるにより、釣殿の方におはしたるに、みなまかでぬれば、池の方に涼みたまひて、人少ななるに、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立てて、うちやすむ上局にしたり。ここにやあらむ、人の衣の音ずと思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例さやうの人のあたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。(中略)こなたの対の北面に住みける下臈女房の、この障子は、とみのことにて、開けながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれと思ひければ、まどひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならんと心騒ぎて、おのがさま見えんことも知らず、簀子よりたた来に來れば、ふと立ち去りて、誰とも見えじ、すぎずきしきやうなりと思ひて隠れたまひぬ。(蜻蛉⑥二四七―二五〇頁)

『源氏物語』の垣間見の場面はほぼ類型化されており、例えば、竹河巻で夕霧の息子である蔵人の少将が玉鬘の大君・中の君を垣間見する場面では、最初に「のどやかにおはする所は、紛るることなく、端近なる罪もあるまじかめり。」(⑤七五頁)と語られ、訪問者の少ない邸宅であり、姫君たちが油断しているということが垣間見を予感させる。そして、その言葉の通り、少将が姫君たちを垣間見た時は、姫君たちは端近な場所で碁を打ち、女房たちは御簾を捲き上げて応援しているという状況であった。加えて、兄弟たちの留守により「人少ななる」時であり、しかも廊の戸が開いていたとある。これらの点をまとめると、垣間見が自然に行われる場面では、

・ 見られる女性が端近な場にいること。

・ 女房たちの注意も散漫であること。または人が少ない状況にあること。

・ 何らかのミスで見られる女性の居る場所が露わになっていること。

というような、見る側に好都合な条件がそろっている。これらの条件は『源氏物語』の他の垣間見の場面にも符合する。

薫の女一の宮垣間見の場面でも、垣間見の条件である「人少ななる」ことが強調される。女一の宮が普段は居ることのない渡殿という女房たちの空間に一時的に居住していたこと、そして薫が僧に会うためにこの渡殿の近くの釣殿を訪れ、その時には僧たちが退出してしまっていたこと、また、御八講の後で聴聞していた女房が疲れて局に下がり、御前に人が少なかったこと、さらには下臈女房の障子を開けたまま下がるというミスを犯していたこと

がこの垣間見につながった。「今日まかづる僧の中にならずのたまふべきことある」という薫の用件は、この垣間見のために薫を人の少ない空間に導くための伏線でもあった。釣殿とその付近は僧たちの退出で、すでに人の少ない空間になっており、この空間は垣間見には恰好の場所となる。その垣間見の後、この渡殿は女一の宮の面影をとどめる場として薫の心に深く刻まれる。そこにいる女房との会話を楽しむふりをして、薫は何度もこの西の渡殿を訪れるようになる。

このように今まで女房の空間としてのみ機能していた渡殿が突如、恋愛の場として物語内で重要視されるようになる。そして、このことは『源氏物語』以降の物語にも見られるが、女房の居住空間として前章で紹介した『狭衣物語』のⅢの渡殿はその好例である。客人がいることに遠慮して渡殿にいた姫君と狭衣はこの場で一夜を明かすことになる。寝殿や対に比して奥行きのない渡殿にいるためか、有明の月の光が「格子の隙どもより、ところどころ漏り入りたる」(巻四②二八頁)という状態になる。この状況に狭衣はたまりかねて、格子を押し上げて姫君の顔を確認しようとする。そしてこの姫君の顔が狭衣の思慕する源氏宮に瓜二つであったことから、この姫君は狭衣の自邸に引き取られ、彼の妻として暮らすに至る。このように、物語内で重要な位置を占める女君との出会いの場が、女房の生活空間として機能していた渡殿であったことも興味深い。

また、渡殿は垣間見をする人物の居る空間でもある。通路としての機能を持つ渡殿は、隣接する寝殿や対の内部を覗きやすい。『源氏物語』野分巻でも夕霧が「東の渡殿の小障子の上より、妻

戸の開きたる隙を何心もなく」(③二六四頁) 覗いている。『狭衣物語』ではこのパターンが増加し、父の妻・洞院の上が引き取った今姫君のいる西の対の様子を狭衣が渡殿から覗く場面がある²¹⁾。狭衣はまた、長年思慕している源氏宮の居所の様子を渡殿の戸から見通すこともあった²²⁾。渡殿は寝殿や対に接しているため、そこに居住する人物を近くで観察することができた。一方で女性たちは渡殿からの視線に気付かず、無防備な姿を男性たちに露呈してしまう。このように、渡殿は、寝殿や対からは死角となり、男性たちに垣間見を引き起こさせる場としても位置づけられていくのである。

おわりに

渡殿と廊は規模と機能の面では同一であるため、諸注釈では混同されることが多かった。しかし、渡殿は殿舎間をつなぐという機能に加えて、『源氏物語』や『紫式部日記』に描かれているように、女房の局を備えるという機能も持っていた。このことが渡殿という空間の最大の特徴であったとも言える。廊は居住空間になることもあったが、女房の局を置く例は見られない。渡殿は『源氏物語』とそれ以降の物語の中で女房たちの空間としても機能し、女房と男君たちとの交際の場ともなる。そして、『源氏物語』蜻蛉巻の垣間見の一件からは、その注目度が増し、恋愛物語の舞台としてその価値を高めるのである。女一の宮という最も高貴な女性を梁間二間しかない空間に置き、薫に垣間見の機会を与えた。このことによって、それまで注目されなかった渡殿が薫の意識上で、そして物語上においても重要な働きを持つ建物に変貌

する。『狭衣物語』は、この『源氏物語』蜻蛉巻で作られた渡殿のイメージを引き継いで、渡殿という空間を恋愛物語に積極的に取り入れていく。『源氏物語』において、これほどまでに渡殿という空間が重用されたのは、『源氏物語』の作者紫式部が中宮彰子の里邸・土御門邸の東の渡殿で生活していたことも関係しているように思われる。渡殿の局で道長の訪れも経験もした彼女の心中に、渡殿という空間は深く刻まれたことだろう。渡殿は紫式部にとっても特別の空間だったのである。

注

(1) 池田亀鑑氏『源氏物語事典』東京堂出版・昭和三十五年三月。

(2) 『日本国語大辞典』(小学館・平成十四年一月)の「渡殿」の項には「二つの建物をつなぐ屋根のある板敷きの廊下。渡り廊下。この廊に部屋を設けたりもする。細殿。わたりどの。」とあり、「廊」の項には「建物と建物を結び、あるいは建物から突出した細長い建物。また寺院の回廊。ほそどの。廊廡。」と書かれている。

(3) 石田穰三氏・清水好子氏校注『新潮日本古典集成源氏物語四』(昭和五十四年二月)の蜩巻のこの部分の「渡殿」には「前の行に「こなたの廊」とある廊」という注が付されている。また、玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』第五巻(角川書店・昭和四十年十二月)では、「こなたの廊」に「花散里の御殿の渡廊」という注が施され、「こちらの渡殿」と口語訳されている。

(4) 鈴木温子氏は論文『源氏物語』の邸宅考―「廊」という住居について―(『駒澤国文』第四十号・平成十五年二月)の中で、このように「廊・渡殿」と併記されている点について、「古い写本で

は句読点は施されないため、「廊渡殿」という固有名詞ではという疑問が生じる。」としながらも、「しかし、同時代の漢文日記である『小石記』（記録年代978～1032）、『権記』（991～1017）、『御堂関白記』（998～1021）及び、もう少し前になる『貞信公記』『九暦』にもそういう名称はみえないため、ここでは「廊」「渡殿」が別のものとされていたとみることができる。」と述べられている。「廊」「渡殿」に関しては、増田繁夫氏も「寝殿造における寝殿・対の屋以外の建築物」（倉田実氏編『王朝文学と建築・庭園』竹林舎・平成十九年五月）の中で言及されている。増田氏もその用途や形態から、両者は異なったものであったと考えられている。

- (5) 注(4) 鈴木氏論文、または同氏の「廊の戸」からの視き見「源氏物語」の「廊」考——（駒澤国文）第四十二号・平成十七年二月）を参照。

- (6) 池浩三氏・倉田実氏による「対談『源氏物語』の建築をどう読むか」（『国文学解釈と鑑賞別冊・源氏物語の鑑賞と基礎知識No17 空蟬・至文堂・平成十三年六月）の中でも「廊」と「渡殿」の違いについての議論があり、蜚巻のこの箇所がこの問題を考える恰好の例として取り上げられている。ちなみに、倉田氏も「廊」と「渡殿」を別個のものと理解されている。

- (7) 裏松光世『故実叢書・大内裏図考証』（第二六巻）明治図書出版・昭和二十六年。

- (8) 井上充夫氏「廊について——日本建築の空間的發展における一契機」『日本建築学会論文報告集』第54号・昭和三十一年十月。

- (9) 平山育男氏「寝殿造りの構成⑩廊 渡殿とはどう違うのか——」（注(6) 書所収）。

- (10) 太田静六氏『寝殿造の研究』吉川弘文館・昭和六十二年二月。

- (11) この点に疑問を持った樺山温氏は論文「夕顔の巻における「西

の妻戸」「渡殿」（『解釋學』第十輯・平成五年十一月）の中で、この部分に関する現代の注釈書の説をまとめられている。この渡殿の場所について注釈を施しているのは、山岸徳平氏校注の『日本古典文学大系⑭源氏物語一』（岩波書店・昭和五十二年八月）と石田穰二氏・清水好子氏校注『新潮日本古典集成源氏物語一』（昭和五十一年六月）であった。『大系』は、この「渡殿」を「西の対から中門の方にいく渡殿（廊）である。」とし、『新潮集成』は「西の対に通じる中門廊」としており、廊と渡殿を混同した解釈がなされていた。

- (12) 角田文衛氏・加納重文氏編『源氏物語の地理』思文閣出版・平成十一年八月。

- (13) 池田亀鑑氏の『源氏物語事典』でも「釣殿」について、「寝殿前の庭に設けられた池にのぞむように、東または西の対と廊をもつて接続され、廊の南端に構えられたもの。」と説明されている。

- (14) 角田文衛氏「土御門殿と紫式部」（『紫式部伝——その生涯と『源氏物語』——源氏物語千年記念』法蔵館・平成十九年一月）。

- (15) 「枕草子」九五段には「屋のさまもはかなだち、廊めきて、端近にあさはかなれど、」（増田繁夫氏校注『和泉古典叢書1枕草子』和泉書院・昭和六十二年十一月・九二頁）とある。

- (16) 『源氏物語』宿木巻には「薫」「この寝殿は、変へて造るべきやうあり。造り出でんほどは、かの廊にものしたまへ。」（⑤四五七頁）とある。

- (17) 注(14) 角田氏論文。

- (18) 増田繁夫氏「紫式部伝研究の現在——渡殿の局、女房としての身分・序列・職階——」（増田繁夫氏・鈴木日出夫氏・伊井春樹氏編『源氏物語研究集成15源氏物語と紫式部』風間書房・平成十三年十一月）。

(19) 紫式部の局の位置に関しては、増田氏以外にも多くの研究者が考察を加えられている。安藤重和氏「渡殿の戸口の局」の位置をめぐって『紫式部日記試論』、『国語国文学報』(昭和五十四年三月)によると、紫式部の局の位置は次の四説に分かれる。

(イ) 東の対の内部の(北渡殿へ出る)戸口〓益田勝美氏『紫式部日記の新展望』、曾沢太吉氏・森重敏氏『紫式部日記新釈』(武蔵野書院・昭和三十九年二月)、池田亀鑑氏・秋山虔氏校注『岩波文庫紫式部日記』(岩波書店・昭和三十九年十一月)、中野幸一氏校注『日本古典文学全集紫式部日記』(小学館・昭和四十六年六月)

(ロ) 東の対より東中門へ到る東廊の、東中門に近い戸口〓池田亀鑑氏『紫式部日記考証』(至文堂・昭和四十二年六月)

(ハ) 寝殿と東の対とをつなぐ北渡殿の西端〓岡川佳子氏「渡殿の戸口の局」考―『紫式部日記の新展望』の説をめぐって―『平安文学研究』第二十一輯・昭和三十三年六月)、池田亀鑑氏・秋山虔氏校注『日本古典文学大系紫式部日記』(岩波書店・昭和三十三年九月)

(ニ) 寝殿と東の対とをつなぐ北渡殿の東端〓角田文衛氏『紫式部の身辺』(古代学協会・昭和四十年十一月)、萩谷朴氏『紫式部日記全注釈上・下』(角川書店・昭和四十六年十一月および昭和四十八年三月)

安藤氏はこれらの四つの説を提示した後、北渡殿東端を「局」ではなく、「馬道」であったとし、(ハ)の説の正当性を論証されている。

(20) 『源氏物語』匂兵部卿卷には、「女一の宮は、六条院南の町の東の対を、その世の御しつらひあらためずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。」⑤(一八頁)とある。

(21) 『狭衣物語』本文には「大臣の御方に参りたまへるに、この今姫君の住みたまふ対の前を過ぎたまへば、まこと、いかやうにかとけしきもゆかしうて、渡殿より少しのぞきたまへるに、御簾所々押し張りて、人々あまたこぼれ出でて居たり。」(巻一①一〇四頁)とある。

(22) 同じく『狭衣物語』本文には「源氏の宮の御方にも、常よりも疾く起きたるけはひにて、夜もすがら降りつもりたる雪見るなるべし。その渡殿より見たまへば、若きさぶらひども五、六人、きたなげなき姿どもにて雪まろばしするを見ると、宿直姿なる童べ若き人々などの出であたる、また寝くたれのかたちども、いづれとなくとりどりにをかしげにて、(中略)御前には起きさせたまひてにやとゆかしければ、隅の間の御障子のほかなるより、やをら見たまへば、母屋の際なる御几帳どももみな押しやられて、その柱のつらに、脇息に押しかかりて見居させたまへり。(中略)人々見やりて、「この渡殿の御障子こそ少し開きたれば、御覧じやしつらん。あさましき朝顔を」とわびあひたり。」(巻二①二三四頁)とある。

〔付記〕各作品の本文引用については、『源氏物語』『宇津保物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『栄華物語』『大鏡』『紫式部日記』に関しては「新編日本古典文学全集(小学館)」を使用した(算用数字は「新編全集」の巻数を表し、漢数字は頁数を表す)。また「小右記」「中右記」に関しては「大日本古記録」(岩波書店)を、『春記』に関しては「史料大成」(臨川書店)を使用した。

(みずたひろみ/神戸大学大学院生)